

学問のすすめ 4

社会学のすすめ



作田啓一
日高六郎 編

社会学を考える

I 社会学とその時代

II 社会学とその方法

III 社会学とその課題

IV 文献解題——社会学とその周辺

学問のすすめ 4

社会学のすすめ

作田啓一・日高六郎編

筑摩書房

社会学のすすめ

学問のすすめ 4

1968年6月30日 初版第1刷発行

1982年9月10日 初版第21刷発行

編 者 作 田 啓 一
日 高 六 郎

発 行 者 布 川 角 左 衛 門

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8

電話 東京 (291) 7651 (営業)

(294) 6711 (編集)

©Sakuta, Hidaka. 1968 振 替 東 京 6 - 4 1 2 3 番

(分類)1334(製品)03104(出版社)4604 三晃印刷・永興舎製本

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが小社読者係宛に
御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

まえがき

日本での社会学の歴史は七〇年に近いといえる。しかし社会学にたいする関心がたかまったのは、とくに戦後である。

いま社会学に接触するのは、大学で教養科目としての社会学の講義をきく学生、社会学を専攻しようとする学生、隣接科学を専攻する学生や研究者たち、一般に社会学に興味をもつ社会人、などにわけられよう。そうした人たちを対象にして、数多くの社会学の概論書、入門書あるいは案内書も書かれている。

しかしそうした人びとの要求が、それらの社会学への手引きで十分に満足させられているかというと、私たちは必ずしもそうは思わない。初心者であればあるほど、求めるものは素朴ではあるけれども、しかし根本的なところにふれることがあると思う。大学のなかでの社会学の標準型になじむと、社会学とはこんなもの、という一種の慣れができる。しかし最初に素朴に社会学に求めているものは、そうした慣れのなかで必ずしも解消していないようである。

社会学はどのような問題意識から出発するのか。それは現代社会が当面している問題と、どのようなところでふれあうのか。社会学の扉をたたこうとするものがまず求めるのは、そうしたことである。そしてそれは、初心者だけではなく、専門学者もつねに新しく自分自身に問い

かけなくてはならない問題であると思う。

この「社会学のすすめ」のねらいは、そうした問いかけにいくらかでも答えたいということだった。たんに学説史の紹介や現代の流行の理論の解説などを目標とするというより、むしろ執筆者自身の社会学研究のなかから生まれてくる疑問や不安や問題意識をふくめて、社会学がほんとうに標準をあわせるべき標的がなんであるか、それはどのような武器によって打ちたおすことができるかを、読者とともに考える本にしたかった。こうした意味で、従来の入門書とはちがった役割をはたしたいと考えた。そのねらいがどの程度まで成功したか。その点では必ずしも自信はない。しかし行間からそうしたねらいをいくらかでも感じとっていただけなら、編者としてたいへんにうれしい。

東京と関西で分担執筆となったが、大学などのせまい垣根をこえての作業がこうした機会になされたこともよかったと思う。ただ東西よりあって十分に打ちあわせをすることができなかったのは心残りである。にもかかわらず力作をよせてくださった執筆者諸氏に感謝したい。さらに筑摩書房編集部の良心的な協力なしに、この本は生まれなかったであろうことを、あわせしるしておきたい。

一九六八年六月一日

作田啓一

日高六郎

本書刊行後十年を経過したので、今回の増刷では、本文および巻末の文献解題に一部訂正、増補を施した。

(一九七八年二月一三日)

目次

はじめに

社会学を考える

.....日高六郎 三

戦前の社会学と戦後の社会学 三
とう 二〇 日本社会学の特徴 七 方法論をも

I 社会学とその時代

.....庄司興吉 三

はじめに

.....二五

一 前近代から近代へ

.....二七

共同体の崩壊と社会の成立 七
による社会学の創始 二〇 科学の発達と社会の科学 六
念論とマルクスの登場 三三 産業的社会としての近代社会 三
世紀後半における社会学の発展 元 資本主義社会としての近代社会 七
ドイツ観 一九

二 近代から現代へ

.....三

近代と現代——近代化の問題 三 マックス・ウェーバーの「合理化」論
言 科学主義の再検討と価値の問題 三 「知識社会学」とインテリゲンチヤ 元 「大衆の反逆」の時代としての現代 四 ナチス・ドイツの狂暴な大衆の国家 四 現代アメリカの無気力な大衆の社会 五

三 もう一つの現代 五

帝国主義と社会主義の時代としての現代 五 ロシア革命と「マルクス主義社会学」 三 人民戦線戦術とスターリンの時代 五 社会主義社会における社会学——結び 五

II 社会学とその方法 六

一 社会学的認識と価値判断 六

問題のありか 四 社会学的認識の特質と諸相 六 観点の主観性 六
認識の存在拘束性 三 理念型的把握と論理操作 五 社会学的認識と実践 六

二 了解的方法と自然科学的方法 六

はじめに——一つの論争 六

マックス・ウェーバーの了解的方法 六

行為の了解 六 理念型と因果的説明 六 歴史における人間の主体性 六

自然科学的方法 六

客観性と観察言語 七 「内面」の客観的認識の追求 七 モデル的方法 七

人間の科学としての社会学の問題 七

認識の客観性 七 動機の把握と因果認識 七 方法と対象 一〇

おわりに——人間観の問題—— 一〇

三 構造と機能 作田啓一 一〇五

モデルの効用 一〇五

モデルの概念 一〇五 分析の一事例——近親婚の禁止 一〇七

社会関係の構造 一〇七

構造・機能・体系 一〇七 四つの欲求 一一 欲求充足の均衡 一一 努

力と報酬の均衡 一一 価値と構造 一一 三者間の関係 一六

二つの機能主義 二六

要素派と全体派 二六 活動と機能 三〇

集団活動とその機能 三三

適応活動 三三 統合活動 三四 目標達成活動 三五 緊張操作活動

三六 要約と残された問題 三三

四 方法としてのマルクス主義 田中清助 三四

マルクス主義的批判 三六

方法論について 三七

普遍的方法論 三六 一般的方法論 三七 特殊的方法論 三八

方法・技術と特殊的方法論 四〇

機能的関係の問題 四一 マルクス主義社会学の調査方法 四二

III 社会学とその課題 一四〇

一 個人・集団・全体社会 井上俊一 一四〇

社会と集団 田啓一 一四〇

全体社会と部分社会 一四 共同生活の分化 一五 機能要件と集団類型 一五

一五

個人・中間集団・国家 一五

中間集団論の系譜 一五 中間集団への期待 一六 大衆社会論の二つの

論点 一五

中間集団の形態と機能 一六

中間集団としてのコミュニティ 一六 中間集団としてのアソシエーション 一六

ソ 一六 自発的結社の重要性 一六 自発的結社の機能障害 一六

中間集団論のインプリケーション 一六

二つの応用形態 一六 「中間階級」論 一六 「企業者職能」論 一六

社会主義と民主主義 一六

二 疎外の問題 三沢謙 一七

はじめに 一七

産業社会の病理 一七

地上の楽園 一七 疎外感 一七

大衆社会の病理 一六

病める社会 一六 疎外される人間 一八

資本制社会の病理 二五

問題点 二五 疎外と社会 二六 疎外の克服 二九

三 近代化の問題 北川隆吉 一五

近代化の三つの前提 一五

その一・工業化 一五 その二・都市化 一六 その三・社会文化的变化 一六

近代化の図式 一六

農村的と都市的 一六 農業・伝統的と工業・近代的 一六 精神的近代 一六
の問題 二〇

「近代化論」の検討 二〇

近代化論の成立と背景 二〇 西欧モデルと日本の近代化 二四 近代化

論の問題 二五

四 大衆社会——その社会構造と精神構造 井上 俊 二〇

大衆社会論の過去と現在 二〇九

大衆社会論の源流 二〇九 大衆社会論の特徴 三二 わが国における大衆

社会論の展開 三三 社会構造論的アプローチ 三三

社会構造の変化 三三

アプローチ 三三 「経済」の領域 三三 「政治」の領域 三七 「社会」

の領域 三六 「文化」の領域 三六

大衆の意識と行動 三三

「消費革命」と中流イメージ 三三 「ピラミッドを登る人びと」と「オア

シスに憩う人びと」 三三 政治的無関心と積極主義 三三 マイホーム主

義とナショナルリズム 三三 同調と非同調 三三 価値体系の変動 三六

レジャーとあそび 三三

「レジャー時代」 三三 「変身」のあそび 三〇 あそびと現実 三三

おわりに 三三

五 社会変動 塩原 勉 三三

社会的生活の生産と再生産 三三

社会的生活とその発展 三三 社会学的分析の位置 三三 社会の諸領域

の相互作用 二四〇

社会構造とその変動 二四二

構造 二四二 社会構造の分析 二四三 整合化の変動 二四六

発展・変動・矛盾解決 二四八

社会発展から社会変動へ 二四八 構造分化と統合 二五〇 矛盾とその解決
二五三

IV 文献解題——社会学とその周辺 二五〇

一 文献解題 二五三

二 日本社会学の歴史と問題 二五七

戦前、戦中の社会学 二六〇

戦後の社会学の展開 二六八

日本社会の現状と社会学 二七一

社会学のすすめ

社会学を考える

日 高 六 郎

戦前の社会学と戦後の社会学

A いま日本の社会学界は質・量ともに高度成長しているようですね。

B 戦前社会学を勉強したのからみると、たしかに盛大になったと思うね。ぼくは一九三八年に大学へはいったのだが、そのころ社会学科のある大学は、東大、京大、法政など、ごく少数だった。いまは、あちこちの大学で社会学部さえ作られている。ぼくの学生のころの日本社会学会の会員は約三〇〇名、いまは約一二〇〇名だ。

A 戦後社会学が脚光をあびるようになった、ということでしょうか。

B もちろん、大学教育をうけるものが飛躍的に増え、その勢いのなかで、社会学とかぎらず、社会科学を勉強する学生も増えているね。また、研究者の研究生活をささえる条件もできてきたこともある。しかし、ただ時の勢いということだけではなく、社会学の質的転換こそ注目しなければならないと思うね。

A 学問の世界に、戦前と戦後というような区切りで、質の変化がありうるものでしょうか。

A 二〇歳の学生
B 五〇歳の研究者

B それはたい質問だね。たしかに、物理学者の頭脳のなかの物理的世界は、戦中も戦後も質的に変化しなかったらうね。つまりそのことは、物理学がある種の科学的自立性をすでに確保しているということの証明だろう。もっとも戦後日本の物理学者は軍事的研究はしないということを確認しあった。

その点は戦前と戦後とに質的变化があったといえる。しかしそれは、科学と現実の政治世界との関係、をどうするかという問題領域での変化であって、物理学の認識内容それ自体での変化ではないわけだ。

A その議論からいうと、戦前の日本の社会学は学問的自立性がなかったというふうに聞こえますが、どうなのですか。

B それもまたきびしい質問だが、たしかに、たとえば物理学と比較するならば、社会学とかぎらず、社会諸科学は、そのときどきの政治的社会的状況に動かされやすいことは否定できないね。しかしそのことから単純に、社会諸科学は物理学などにくらべるならば、たいへんに幼稚な学問だという結論にはならないのではないか。もちろん社会諸科学の対象の複雑さといえどそれまでだが。しかし対象のとなえ方、対象への接近の仕方さえ、じつはいまなお論争中の問題だということもあるわけで、そうした複雑さと困難をかかえながら、共通の了解を歩みひろげつつあるのが社会諸科学の現状であり、社会学の現状だと理解してほしいね。

A 具体的にはどういうことですか。

B 戦前の社会学の一部には、時勢の大波にまきこまれてしまったものもあったと思う。その意味では学問的自立性が失なわれたという批判から免れないだろう。しかし、それでは「まきこまれない」立場とは、いったいどのような立場だったのかというと、その判断は必ずしも一致しないだろうね。そこに、いまぼくの言った複雑さがあるのですね。